

稀代の心理臨床家，乾先生を懐う



人間科学部心理学科長 長 田 洋 和

私のようなものが，乾先生への献辞などは，おこがましい限りなのですが，たまたま，乾先生のご定年の時期に，人間科学部心理学科長を努めさせて頂いております故，役職上，筆を執らせて頂きます。とはいえ，宇都人間科学部長から，ご献呈辞がなされておりますので，私からは「乾先生との想ひ出」の如く，申し上げさせて頂きたいと存じます。

私が専修大学に入職したのは平成15年です。正直，心理臨床の教育機関としてはピンと来ず，どのような先生方がご指導されておられるのか，全く知らない状態での入職でした。私の恩師は，児童精神科医であるのですが，師は同年代の先生方とは臨床スタンスが違い，理論に頼るのではなく，診断基準に忠実に則り，臨床面接の中で診断をすることこそが，精神科医としての使命であるというスタンスでした。私もそのスタンスで心理臨床を進めてきておりましたし，今でもわが国の文化に即した形での evidence based practice というスタンスであります。

前置きはさておき，入職後，わが国の精神分析の大家でいらっしゃる乾先生と出会うことになりました。もちろん，私も学生時代に，心理臨床の指導を受ける中で，さまざまなスタンスを「学んで参り」ましたし，その中に，精神分析もございました。実際にクライアントと対峙し，精神分析的“的”なスタンスで関わったこともございます。その度に，精神分析医（師とは別人）から，「ダメ出し」をもらいましたし，また，自分の中でも，とても難しいテクニックであり，到底できるものではない，と自覚致し，師のスタンスもあり，精神分析とは対極に位置するようになっていきました。私の中では，精神分析とは難しく，また，それをテクニックとして心理臨床を行っていらっしゃるセラピストの先生方もまた「ムズカシイ人」ばかりというレッテルを勝手に貼っておりました。敢えてこの場で一言で申し上げますと，精神分析家は，「何を考えているかわからない」「普段から人の裏を見透かすような態度をとられる」というイメージに私の中では固着してしまっておりました。実を言うと，このイメージは未だ払拭できておりません。

先にも述べました通り，入職後，心理学科の歓迎会（於：新宿）で初めて，乾先生とお会いした訳です（もちろん，遠目では諸学会で「お見かけ」は致しておりました）。裏表の無いストレートなご対応に感銘を受けたことを今でも覚えております。私が持っていた精神分析家の印象とは全く異なっておられました。私が勝手にイメージを膨らませているだけかもしれませんが（固着したイメージ故），精神分析家の諸先生方は，笑っていてもどこか，その笑顔に独特の「影」があるのですが，乾先生の笑顔には，全くそのような影はなく，お笑いになるときは，心底笑っていらっしゃるようでした。今もそのイメージは変わりません。もちろん，精神分析家として，クライアントと対峙なされる際には，全く違う態度で接せられるのでしょうけれど，心理臨床の場ではないところでは，いつも「腹を割って」お話をされている印象を持っております。私などは，心理臨床を行うセラピストであるときも，研究者である時でも，また，そうでない場でも同様の態度であるのですが，乾先生のお振る舞いに感銘を受けておりました。ただ，そのように，周囲から見られることも，実は，稀代の心理臨床家でいらっしゃる乾先生だからこそだと思います。

個人的な想ひ出を一つ紹介させて頂きたいと思います。2004年1月。あれは，雪のセンター試験の日でした。センター試験監督で一緒になりました。入職後，初の大きな入学試験監督業務でした。右も左もわからず，また，独特のピリピリした雰囲気のある92A 会議室でした。窓際の後ろのテーブルに，乾先生をお見かけし，藁にも縋る気持ちで，恐る恐る先生の対面の席につきましたところ，「おはようございます！ ご苦労様！ イヤー参ったよ。雪でしょ！ 来るの大変だったんじゃない？」と，普段通りの気さくな笑顔で，お迎え下さりました。

そのとき、文字通り、私の緊張も「溶けて」いくのがわかりました。その日は、92A 会議室に戻って、休むたびに、いろいろな話をしてくださり、初めての大きな試験監督でしたが、無難に済んだことを今でも鮮明に覚えております。

飲み会など宴会にも、いつも、ご出席下さりました。お酒はお飲みにはなられないのですが、私どもが、酔いに任せて、騒いでおりまして、いつも柔和なお顔で、話の輪に加わって下さりました。私の若気の至りのな経験も、かすんでしまうほどの乾先生のお若いときの武勇伝も数多く拝聴致しました。いわゆる「やんちゃ」さがあり、お若いときはもちろんのこと、今でも、いい意味での「やんちゃさ」をお持ち合わせでいらっしゃり、それがまた、乾先生が周囲を惹き付ける魅力になっているのだと思います。

Workaholic.....まさに、乾先生もそうであると、尊敬の念を込め、敢えて申し上げさせて頂きたいと思います。いつお休みなのだろうかと思うほど、本当にいつもお仕事をなされておられました。学内の委員等役職については、落ち度無くこなされておられました。個人研究室は、朝早くから、夜遅くまで灯りが灯っており、学生、院生へのご指導もご熱心で、一切手を抜かず、学生の身になってこなされておられました。大学教員として、当たり前のことを当たり前になされておられた姿は、常々、見習わなければならないと思っておりました。

稀代の心理臨床家でいらっしゃる乾先生のご助言（スーパーヴィジョン）を受けることを目的に本学大学院に入学し、博士論文執筆もさながら、乾先生のスーパーヴィジョンを受けることができるということが大変貴重な勉強となった院生も数多くいたと思います。そうした、学生への指導の他、学会、研究会、研修会での講演、心理臨床家としてのご指導など、繰り返しになりますが、本当にいつ休まれておられるのかというほど、お仕事をこなされておられました。いつも、分厚いシステム手帳をご覧になり、スケジュールをご調整されている姿が懐い起こされます。

会議や委員会に同席させて頂くことも多かったのですが、意見の違う場面で、生意気な意見を申し上げたこともあります。厚顔無恥とでも言いましょうか、今となっては、大変恥ずかしく、そして恐縮至極であります。そのような場面でも、顔色一つ変えず、ご対応下さっておられました。また、私だけではなく、「若造」達が、喧々諤々となって議論している場に、まさに鶴の一声で、乾先生が、柔らかい口調で意見を申されるだけで、場が和むだけでなく、違う意見がまとまったことが、数多くございました。乾先生から放たれるお言葉であることももちろんなのですが、加えて、あの独特な柔らかさが、緊張した場の雰囲気を一変させるお力を持っておられました。稀代の心理臨床家ならではの、私のような一兵卒としての心理臨床家では、到底持ち合わせないオーラを持っておられました。どのようにしても追いつかない、また、真似できない、心理臨床家としての天賦の才をお持ちなのだと思います。

今、改めて、このような献辞を述べさせて頂く機会を頂き、あれもこれもと浮かんで来ます。身近に偉大な、稀代の心理臨床家がいらっしゃったにも関わらず、心理臨床家の端くれである私が、心理臨床家として、何かを学ぶべきであったと後悔の念はございます。もちろん、ご定年後も、私をはじめ、心理臨床家へのご指導をお続けになられるとお聞きしておりますので、学べる機会はいくらでもあるでしょうけれど、同じ（というには、甚だおこがましいのですが）大学教員としては、そのお姿を目に焼き付けることしかできず、何か私自身が学べたかという、すぐには答えが出て参りません。ただ、私にとっては、この10年間、稀代の心理臨床家でいらっしゃる乾先生と、同じ専修大学、同じ学科、大学院でお仕事をさせて頂けたこと、これだけは、これから大きな財産となっていくことは間違いありません。

乾先生、本当に、お疲れさまでした。そして、これからも、何とぞ、よろしくお願い申し上げます。